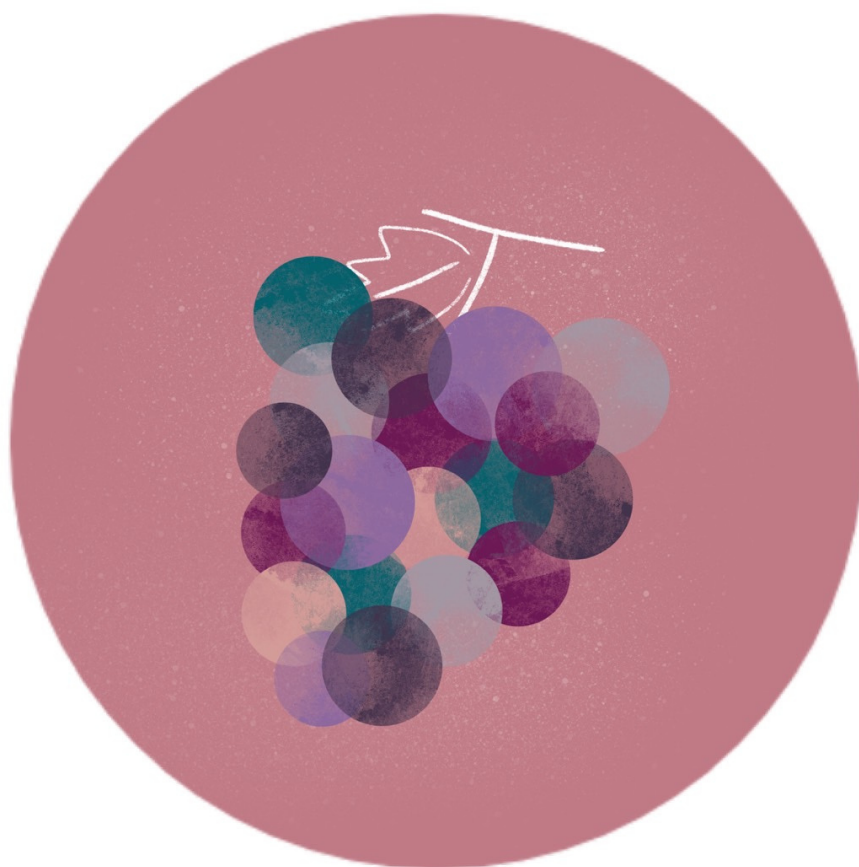


2024年度成人科テキスト

月刊「ぶどうの木」

4月号



わたしはまことのぶどうの木、あなたがたはその枝である。(ヨハネ15:5)

名前

目次

証し「人生を歩みつつ共に学びあう喜び」	・・・ 1
郷秀男兄	
解説・コリントの信徒への手紙	・・・ 3
第1課 イエスさまのもとでの「一致」	・・・ 5
ショートメッセージ：田中由記子姉 聖書日課：工藤征治兄	
第2課 力を合わせて働く	・・・ 9
ショートメッセージ：郷健人兄 聖書日課：宇佐美典子姉	
第3課 弱い人々のための自由	・・・ 13
ショートメッセージ：栗山義重兄 聖書日課：渡部和子兄	
第4課 福音に共にあずかる	・・・ 17
ショートメッセージ：郷秀男兄 聖書日課：小沢敬一兄	

表紙イラスト：友納聖子姉

おしらせ

- 成人科テキストのタイトルが「ぶどうの木」になりました。
「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」（ヨハネ15：5）
イエスさまに繋がる枝として、共に御言葉を学びましょう！
- 成人科は毎週日曜日 10：15～50 地下フェロシップホールにて行っています。ぜひご出席ください。
- ショートメッセージの動画は、教会ホームページからも視聴できます。
上部メニューから「教会学校」をクリック→「成人科」をクリック
- ショートメッセージと聖書日課を、メールで受け取ることができます。
ご希望の方は成人科奉仕者（ショートメッセージ、聖書日課の執筆者）にお声がけください。
- 「ぶどうの木」のボックスへの配布をご希望される方も、奉仕者までお知らせください。

証し「人生を歩みつつ共に学びあう喜び」

郷秀男

**聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、
義に導く訓練をするうえに有益です。【テモテへの手紙二 3章16節】**

私が20歳のころに聖書に向き合うキッカケとなったのは、今で言えば、あるキリスト教系と称する団体のオリジナル聖書でした。友人からの勧めもあり、好奇心も手伝って自分ひとりで読んでいました。そうこうしている間に、その団体の方が自宅で一对一の学びをしてくださる機会があり数カ月学んだ記憶があります。驚いたのは終末が近いので備えなければならないという強いメッセージでした。

その団体の教会へ誘われましたので、一度はと思い足を運びましたが、何故か教会の前に来た時に「ここはあなたの場所ではない」と声がどこからともなく聞こえた気がしたので、その場で失礼して帰り関係をやめました。思い返せば、この時がイエスさまとの初めての出会いではないかと思っています。

ほどなくして、別の友人がキリスト教に関心があるようだからと彼が出席している吉祥寺にある福音教会の水曜祈祷会に誘われていったのがキリスト教会との初めての出会いでした。ここでは不思議なことに教会の玄関の前で「ここではあなたの肩の重荷を降ろしていいよ」という声が聴こえた気がして平安な気持ちになれたことを思い出します。ここで、毎週の水曜祈祷会で若い神学生の方や牧師先生から聖書の説き明かしを聞くことができました。この時に口語訳聖書を初めて手に取って教会でのメッセージに沿った箇所から読むようになりました。関心を持って自分ひとりでも読もうとしましたが、すぐに挫折しました。あまりに一人で読むには書いてある内容を理解することは難しかったのです。もちろん新約聖書のイエスさまのお言葉には感動したり、旧約聖書のノアの箱舟やヨセフ物語などは物語としておもしろく楽しんで読めました。でも、聖書が伝えようとしている本当の意味・福音は一人では分かりませんでした。

この福音教会には一年あまり祈祷会に出席させていただきましたが、ある日、敬愛していた牧師先生が熊本に赴任することになり、あの先生に会えなくなるのかと落胆して足が遠ざかってしまいました。



すると、こんどは職場の先輩が常盤台教会へと招いてくれました。教会に出席するようになり、ほどなくして当時の教会学校小学科の科長さんから手伝うように言われ、何もわからないままで子どもたちと日曜を過ごすことになりました。イエスさまは不思議なお方です。ひとたび出会いタッチして手を繋いでくださると、イエスさまはご自分からは決して手を放さずいつも共にいてくださることをこれらの出来事から体験しました。それからは大変で聖書もろくに読んでもいないのに子どもたちに何をどう話していいかわからない私は当時のクラス主任の厳しい指導を受けて、毎週「ひかりのこ」というプリントを作って学ぶことにしました。当時は小学科だけで100名くらいの出席があり毎週、冷や汗をかきながらもにぎやかに過ごすことが出来たことは楽しい思い出です。

「インマヌエル・神は我々と共におられる」(マタイ福音書1:23)このみ言葉は教会の皆さまと子どもたちと教会生活を共にまもるなかで真実であると確信できるようになりました。

40歳くらいの時に小学科のご奉仕は若い方々にバトンタッチすることで地区分級の学びや早朝礼拝のご奉仕に加えていただきました。小学科では子どもたちに伝えることの難しさや格闘しましたが、地区分級や成人科では聖書のみ言葉から慰められたこと、励まされたことなどを互いの体験や証し、祈りを分かちあえるという喜びに出会うことができました。なにより世代やジェンダーを越えて教会に集う方々との交わりは楽しいものです。キリスト教会のすばらしさは常盤台教会のなかに満ちていますが日本中、いや世界中のどこのキリスト教会をお訪ねしても旧知の家族のように接していただける恵みがあることです。私自身も韓国、ハワイ、台湾、イギリスの教会を訪問して私たちは国籍、人種に捉われず神の家族であることを実感しました。

イエスさまとの出会いの恵みのなかで、こうした体験を積み重ねながら歩む人生を主に感謝しています。そして、聖書のみ言葉により養われることで得られる日々の心の平安は私の人生のなかで特別であり大切なかけがえのないものとなっています。



解説・コリントの信徒への手紙

【コリントの教会】

福音が広まっていく時代には、当時のどの他の場所とも同じように、コリントでもキリスト者は一つの大きな集会所を持っていませんでした。コリントには多くのキリスト者がいましたが、いくつかの会衆(少なくとも四つ)があり、それぞれに指導者がいました。彼らは家庭や講堂など事情が許される場所で集会を開いていました。

コリントの教会は様々な問題を抱えていました。けれどもパウロはコリントの教会を「神の教会」と言っており、なにより神が建てられた教会であることを強調しています。

第1課 イエスさまのもとでの「一致」 1:10～18

- それぞれの会衆で異なる信仰の理解、運営方法、指導者で対立が起きた(1章)
- コリントはアテネに近く、哲学的雰囲気がかリント教会に浸透していた(2章)
- この世の知恵、自分の哲学では神を認めることが出来なかった
- 神の知恵は聖霊により信仰者に与えられる

第2課 力を合わせて働く 3:1～9

- 教会は神のもの(3章)

第3課 弱い人々のための自由 8:7～13

- パウロにより回心に導かれた人のなかでパウロに対して尊大、横柄な者が現れた(4章)
- 教会の指導者にキリストにある生き方全体をパウロの例に倣うように指導した
- パウロが伝え聞いたこと・・・不道徳(5章)、信仰のある兄弟姉妹間の争い(6章)
- コリント教会の質問の回答・・・結婚問題への回答(7章)、偶像にささげた肉(8章)

第4課 福音に共にあずかる 9:19～27

- パウロがコリントで報酬を受け取らない態度に他の教師からの不満があった(9章) 教会の指導者たちは、その働きで相応しい報酬が与えられることをパウロに確証してもらいたかった
- 偶像礼拝を避けること、市場に出された肉について(10章)

第5課 一緒に主の食卓へ 11:17～26

- 女性のかぶり物
当時のギリシア、その近隣都市は不道徳な女性以外は公の場ではかぶり物をする習慣があった。
キリスト者の女性の一部は信仰から自由を発見し、かぶり物を外して集会に集った
- 主の晩餐
コリントでは主の晩餐が富める者による愛餐に変わり、さらに異教の神殿での酒宴の影響を受けた

第6課 ひとつの霊、多くの働き 12:1～12

- 霊的賜物が与えられる

ヨハネ14:16

「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。」

霊的な賜物はコリント教会のある人たちが明らかに行っていたように教会内で自分の地位を強めようとするために利己的に使われるべきではないとパウロは主張した

第7課 最も大きな賜物 12:31～13:13

- 「愛」キリスト教の第一の教えであり、イエス・キリストの教え、愛はどれにも勝り教会を強くする

第8課 初穂となられたキリスト 15:12～22

- 異言と預言、教会での女性の役割 (14章)

異言

神と語る超自然的な方法。キリスト者すなわち神の子を霊的に啓発し、教会に神のご意思を伝達する霊的手段として与えておられる。

異言を語る者が異言を解き明かす賜物をもっているか、他の人の異言を解き明かすことが出来る場合には教会を啓発することもありえる

- 復活は真実であり、キリストは存在された。今も存在しておられ、生きている人格をもって民を導き守り、再臨の日まで導いてくださる(15章)

コリント人への手紙一は、コリントに来ていたユダヤ教の会堂司でキリスト教に回心したソステネがパウロの口述により書きました。

手紙の最後に、パウロは自分の手で署名し、「主よ、来てください」を意味するアラム語「マラナ・タ」を付け加えています。(16章)

第一の手紙はコリント教会の抱える問題についてパウロが書き送ったものですが、問題の解決とはならずかえって混乱したようです。

そこで、パウロはエフェソにいた時にコリントに行ったりして教会を指導しました。第二の手紙以外にも少なくとも一通、手紙を書いています。

参考図書

- 『新聖書購解シリーズ コリント人への手紙』 1997年 いのちのことば社
『聖書注解シリーズ コリント』 W・バークレー 1970年 ヨルダン社
『バイブルワールド』 ニック・ページ 2016年 いのちのことば社
『バイブルガイド』 マイク・ボーマント 2015年 いのちのことば社
『新聖書ハンドブック』 ヘンリー・H・ハーレイ 2023年 いのちのことば社

(文責・郷秀男)

第1課 イエスさまのもとでの「一致」

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 1章10-18節

主題聖句：皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし
思いを一つにして、固く結び合いなさい。(10節)

10さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。11わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。12あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言っているとのこと。13キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。14クリスポとガイオ以外に、あなたがたのだれにも洗礼を授けなかったことを、わたしは神に感謝しています。15だから、わたしの名によって洗礼を受けたなどと、だれも言えないはず。16もっとも、ステファナの家の人たちにも洗礼を授けましたが、それ以外はだれにも授けた覚えはありません。17なぜなら、キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです。

18十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。

2024年度になりました。4月から6月まで3か月かけて、コリントの信徒への手紙一・二を学んでいきます。

パウロは2回目の伝道旅行の時に、コリントに「イエスをキリストと信じる者たち」の共同体を立ち上げました。そして、3回目の伝道旅行で、エフェソに滞在していた時に、コリントで起きている問題について聞き、手紙を書きました。

本日の聖書箇所で取り上げられている問題は、コリントの共同体の分裂です。当時のコリントのキリスト者たちは、大きな会堂を持たず、小さなグループごとに家庭や講堂などで集会を持っていました。しかし、それぞれのグループが、共通認識をもって協力し合うことはなかったようです。それどころか、それぞれが、「わたしはパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言い合っていました。

そこで、パウロは、次のように質問をします。

「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか？」

「パウロがあなたの方のために十字架につけられたのですか？」

「あなた方はパウロの名によって洗礼（バプテスマ）を受けたのですか？」

私たちは、人によって、様々な価値観や考え方を持っています。気が合って、一緒にいて心地よい仲間もいれば、できれば関わりたくない人もいるでしょう。もちろん、グループに分かれて交わりを持つこと、祈り合うことは大切です。しかし、他のグループを批判したり、否定したり、また、自分たちの方が優れていると驕ったり、他のグループとの交わりを拒絶したりするなど、極めて人間的な思いによる分裂や対立は、神さまを悲しませます。私たちは神さまによって、教会に呼び集められました。ですから、神さまによってのみ、一致することができるのです。

また、主イエス・キリストが私たちのために十字架にかかってくださったので、私たちの罪は贖われ、私たちは永遠の命を得ることができました。私たちを救うために、十字架にかかってくださったのは、イエスさま以外にはいらっしゃいません。

私たちは、イエスさまに直接バプテスマを授けていただくことはできません。そこで、牧師先生に、バプテスマを授けていただきます。しかし、それは、その牧師先生の名によってではなく、「イエスさまの名によって」授けていただくのです。ですから、どなたに授けていただいても、何も変わりはありません。「イエスさまの名によって」授けていただくことが大切なのです。

私たちをイエスさまに出会わせてくださった人、聖書について教えてくださる人が何人もいたとしても、神さまはお一人であり、神さまにつながるためには、主イエス・キリストにつながる以外に方法はありません。

私たちは一人ひとり、考え方も感じ方も違います。全てにおいて、全く同じ人はいません。しかし、イエス・キリストを主と信じ、主に喜ばれる生き方をすることを一番大切にする…そのことにおいては完全に一致して、神の家族として、共に歩んでまいりましょう。

～分かち合い～

- 教会生活を送る上で、どのような時に、一致することが難しいと感じますか？
- 一致して、信仰生活を送るためにはどのようなことが必要だと思いますか？

4月8日(月) コリントの信徒への手紙二 8章1-9節

1兄弟たち、マケドニア州の諸教会に与えられた神の恵みについて知らせましょう。2彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。3わたしは証しますが、彼らは力に応じて、また力以上に、自分から進んで、4聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願い出たのでした。5また、わたしたちの期待以上に、彼らはまず主に、次いで、神の御心にそってわたしたちにも自分自身を献げたので、6わたしたちはテトスに、この慈善の業をあなたがたの間で始めたからには、やり遂げるようにと勧めました。7あなたがたは信仰、言葉、知識、あらゆる熱心、わたしたちから受ける愛など、すべての点で豊かなのですから、この慈善の業においても豊かな者となりなさい。8わたしは命令としてこう言っているのではありません。他の人々の熱心に照らしてあなたがたの愛の純粹さを確かめようとして言うのです。9あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。

「ひとつ」には、職場で一緒に働く事や家族がひとつになる等いろいろあります。クリスチャンの「ひとつ」は、我々の命を与えてくれた神と、イエスさまの愛とひとつになる事です。

4月9日(火) エフェソの信徒への手紙 2章14-18節

14実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、15規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、16十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ぼされました。17キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。18それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。

クリスチャンにも異なる意見を言う権利はあります。でもバラバラでは教会はまとまりません。異なる意見を述べあった後は、聖書に沿った方向にまとめる事が大切です。

4月10日(水) コリントの信徒への手紙二 5章18-19節

12章9-10節

18これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。19つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。

9すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。10それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

「自分の弱さに気がつく」事は極めて難しい事です。人は感情に依って行動します。感情をセルフ・コントロールする事は難しいのですが、聖書を学ぶ事が必要です。

4月11日(木) ヤコブの手紙 4章1-3節

1何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争い合う欲望が、その原因ではありませんか。2あなたがたは、欲しても得られず、人を殺します。また、熱望しても手に入れることができず、争ったり戦ったりします。得られないのは、願い求めないからで、3願い求めても、与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求めるからです。

自分が他人から迷惑を受け、自分は被害者だと何度も経験しました。でも自分が気が付かない内に、他人へ被害を与えていたとは、考えた事はありません。

4月12日(金) エフェソの信徒への手紙 3章14-19節

14こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。15御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。16どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、17信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。18また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、19人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。

人間が得た知識は宇宙全体の知識の数%とも言われています。人類は殆ど知識がないのです。神にたいする畏怖の念が必要です。

4月13日(土) コリントの信徒への手紙一 1章28-31節

28また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。29それは、だれ一人、神の前で誇る事ができないようにするためです。30神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。31「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

定年で引退する迄、健康に恵まれ、無我夢中で働いて来たので、命とか生かされている事を考えた事はありません。クリスチャンになって初めて「命」とか「生きる」事の大切さを考える様になりました。



第2課 力を合わせて働く

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 3章1－9節

主題聖句：わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。（9節）

1兄弟たち、わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語ることができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語りました。2わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかったからです。いや、今でもできません。3相変わらず肉の人だからです。お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。4ある人が「わたしはパウロにつく」と言い、他の人が「わたしはアポロに」などと言っているとすれば、あなたがたは、ただの人にすぎないではありませんか。5アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。6わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。7ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。8植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取るようになります。9わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

前回に引き続き、なんだかパウロが怒っている…と思わされる箇所ですね。せっかく福音を宣傳伝えて、キリスト者としての信仰へと導いたのに、コリントの人々が思うように成熟していないことに、少し苛立っているようにも感じます。

イエスさまも時々、弟子たちの不信仰を嘆き、呆れる姿をお見せになりました。そういう時のイエスさまは「信仰の薄い者たちよ」など、短くグサッとくる呼びかけをした後に、「何が正しいのか」を切々と語ってくださるイメージがあります。それに対してパウロの場合は「どこが間違っているのか」を論理的に言うイメージがあり、それゆえにイエスさまの御言葉とはまた違った形で今の私たちに響いているのだと思います。神さまが、福音書だけでなく書簡も含めて「聖書」として授けてくださった意味が、そこにはあるのかもしれない。

さて、私たちがパウロに「まだ乳飲み子だ！」と叱られないようにするためには、どうしたらよいのでしょうか。本日の箇所ではパウロが問題視している最大のポイントは「派閥争い」です。人間は、僅か3人の集まりであっても「2vs1」の対立関係を作ってしまうと言われます。初代教会においても、様々なルーツを持った人々が、キリスト者というそれまでに無かった新たな群れを作っていくにあたり、多くの衝突が起きたようです。それがやがて「パウロ派」「アポロ派」と、本人たちは全く意図も希望もしていない担がれ方に結びついたのでしょう。

「私はパウロ」「私はアポロ」と、誰かを持ち上げ、その威光を借りながら自己主張をする。これ自体は、いつの時代も変わらない、悪い意味での「人間らしさ」かもしれません。そしてそこに潜む最大の問題は、「人」が「人」にばかり目を向け、「神」に関心を持たなくなってしまうことです。パウロとアポロ、どちらが正しいか…どちらに付くべきか…との外れなことを考える人々に、パウロは「**わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。**」と語ります。皆さんの歩みの中にも、たとえば自分を教会へと導いてくださった人がいたり、キリスト者として心から尊敬する人がいたりするかと思います。そうした方々への敬意や感謝は大切にしつつ、全ての背後におられる神さまにこそ常に目を向け続ける。それが「乳飲み子」脱却への第1歩ではないでしょうか。

ちなみに、個々の自立した信仰を重んじるバプテスト教会においては、安易に群れることよりは、むしろ「私はこう思う」と自分自身を主語にして語る経験の方が得やすいように思います。たとえばこの成人科においても、個々の思いを聞き合うことが一番大切にされており、特定の考え方に一致させることは目的としていません。また、牧師も信徒の1人と考え、パウロやアポロがされたような間違った持ち上げ方をしないのも、バプテスト教会が先人に学びつつ選び取ったことだと思います。こうしたバプテスト教会らしさを正しく受け継ぎつつ、少しでも「霊の人」に近付きたいと願います。

それにしても私が感動を覚えるのは、歪んだ持ち上げ方とは言え、持ち上げられていることに全く奢らず「私は主に仕える者だ」と自分の立場を決して見失わないパウロの姿です。カリスマ扱いされれば大抵の人は気を良くして、尊大な態度を取りかねないと思います。しかしパウロにとっては「人々に持ち上げられた自分」より「神に仕える自分」の方がよほど誇らしく、よほど喜びを感じていたのでしょう。そして人々にもこの喜びに加わってほしい、と願うからこそ「**わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。**」と語ったのです。

自分自身を振り返る時、教会で様々なことを務めながら心のどこかで、誰かに認められたい、賞賛されたい、といった思いを捨てきれない弱さを感じます。まだまだ乳飲み子です。心の目を神さまだけに向けて、皆さんと力を合わせながら、真っすぐに主に仕えていきたいと願います。

～分かち合い～

- 皆さんにとっての「植えた人」「水を注いだ人」はどなたでしょうか。
- 人ではなく神さまに目を向け続けるために、大切なことは何でしょうか。

4月15日（月）エフェソの信徒への手紙 4章11-16節

11そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです。12こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、13ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。14こうして、わたしたちは、もはや未熟な者ではなくなり、人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されたりすることなく、15むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます。16キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。

神さまが働き人を整えてお立てになったのは「奉仕の業に適した者」たちがひとつとされ、「風のように変わりやすい教えに...引き回されたり」しない教会を建て上げるためです。キリストのからだである教会の働きが聖霊に満たされ、働き人が祝福され導かれますように。

4月16日（火）ヨハネによる福音書 10章3-4節、14-18節

3門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。4自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、ついて行く。

14わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。16わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。17わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

「尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする。」（エゼキエル34：16）こうして羊たちは良い羊飼いの声に導かれ、ひとつの群れとなるのです。教会はイエスさまに導かれ集められた者たちの群れです。愛に根ざして真理を語り、この群れがもっと大きく成長できるよう祈ります。

4月17日（水）テサロニケの信徒への手紙二 1章3-4節

3兄弟たち、あなたがたのことをいつも神に感謝せずにはられません。また、そうするのが当然です。あなたがたの信仰が大いに成長し、お互いに対する一人一人の愛が、あなたがたすべての間で豊かになっているからです。4それで、わたしたち自身、あなたがたが今、受けているありとあらゆる迫害と苦難の中で、忍耐と信仰を示していることを、神の諸教会の間で誇りに思っています。

パウロは、信仰と愛と忍耐を神に感謝しています。そして強まる迫害によってキリストから離れてしまわないよう、苦しみは神の国に参与することだと語ります。イエスは十字架の苦しみをもって王座に就かました。イエスに従う者は非暴力と忍耐によって勝利するのです。

4月18日(木) ローマの信徒への手紙 8章31-36節

31では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。32わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。33だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。34だれがわたしたちを罪に定めることができますでしょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。35だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

36「わたしたちは、あなたのために
一日中死にさらされ、
屠られる羊のように見られている」
と書いてあるとおりです。

「神がわたしたちの味方であるならば」これはとても心強い言葉です。いろいろな苦しみや痛みにあおうとも神は必ず私たちの側にいてくださり必要を満たし、勝利へと導かれます。それは「その御子をさえ惜しまず死に渡された」ほど私たちを愛しておられるからです。感謝いたします。

4月19日(金) マルコによる福音書 10章13-16節

13イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。14しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。15はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」16そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

親ならば、良いものをわが子に与えたい、一番大切なことを伝えたいと願うものです。イエスさまは子どもたちが来ることを望んでおられます。イエスさまのもとに子どもを連れていくことが何よりも大事なことなのです。イエスさまは豊かに祝福してくださいます。

4月20日(土) 詩編 119編137-144節

137主よ、あなたは正しく
あなたの裁きはまっすぐです。

138あなたは定めを与えられました。
それはまことに正しく確かな定めです。

139わたしの熱情はわたしを滅ぼすほどです
敵があなたの御言葉を忘れ去ったからです。

140あなたの仰せは火で練り清められたもの。
あなたの僕はそれを愛します。

141わたしは若く、侮られています
あなたの命令を決して忘れません。

142恵みの御業はとこしえに正しく
あなたの律法はまことです。

143苦難と苦悩がわたしにふりかかっていますが
あなたの戒めはわたしの楽しみです。

144あなたの定めは
とこしえに正しいのですから
わたしに理解させ、命を得させてください。

「火で練り清められた(140節)」とは、金や銀が火の中で精錬されて、不純物が取り除かれ清められていくように、み言葉も混じり気のない純粋な神の言葉であると教えています。その尊いみ言葉の恵みに感謝し、み言葉によって生かされていることを喜びとしていけますように。

第3課 弱い人々のための自由

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 8章7-13節

主題聖句：その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです。（11節）

7しかし、この知識がだれにでもあるわけではありません。ある人たちは、今までの偶像になじんできた習慣にとらわれて、肉を食べる際に、それが偶像に供えられた肉だということが念頭から去らず、良心が弱いために汚されるのです。8わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。食べないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって、何かを得るわけではありません。9ただ、あなたがたのこの自由な態度が、弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい。10知識を持っているあなたが偶像の神殿で食事の席に着いているのを、だれかが見ると、その人は弱いのに、その良心が強められて、偶像に供えられたものを食べるようにならないだろうか。11そうすると、あなたの知識によって、弱い人が滅びてしまいます。その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです。12このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことなのです。13それだから、食物のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません。

コリントの町は古代ギリシアのアテネやスパルタと並ぶアクロポリス（都市国家）で、アポロン神殿があり、最盛期には聖地として周辺から多くの巡礼者が訪れていたと言われています。元はギリシアの神々への信仰が根底にある場所であったと想像できます。また、イエスさまの時代ではローマ帝国に支配され、海陸交通の要地であったため、属州アカイアの首都となり、栄えていました。ですので、多くの行商人等が滞在し、様々な民族、宗教が入り乱れていた都市であり、ユダヤ人も多く住んでいました。コリントの信徒の中にもユダヤ教出身の人々もいれば、ギリシアの神々やローマの神々等の全く別の宗教からイエスさまを信じるようになった人々もいたと考えられます。

様々な宗教や文化の多くはお供え物を儀式が終わった後で「おさがり」として頂くことが一般的なのだそうです。ユダヤ教では偶像に供えられた肉は汚れたものとされていました。「弱い人々」の中にはその教えが身につけていた人、イエスさまを受け入れ、主として信じているけど、今まで拝していた別の神さまをないがしろには出来ない気持ちが残っている人もいたのではないかと思います。宗教には三つのタイプがあるとされており、一つは多くの神々を信ずる多神教。二つ目は一つの神を拝むが、他の神々の存在も認める拝一神教。三つ目が神はただ一つしかないとする唯一神教。勿論、キリスト教は唯一神教ですが、他宗教から改宗して間もない信徒たちの内には拝一神教の考え方が残ってしまっている者もいたのではないかと想像できます。

「私の信じる神さまは唯一神であり、神さまとその神の子であるイエスさま以外の神々や偶像などは存在しない。」ので、「そんな存在しない神々や偶像に供えられていたかどうかは罪に値することではない。」という考えを徹底出来ればですが、その考えに至っていない人々にとっては、自分が汚れて（けがれて）しまうのではないかと躓き（つまづき）に成りえてしまう。

ちなみに私は子供の頃、教会学校へ行く道に神社があり、親からもらった献金から「少しこちらにもあげないと」とお賽銭箱に入れていた記憶があります。その時は神さまに怒られると思ひ止めました。

とはいえ、「だからわたしは今後決して肉を口にしません。」という対応はちょっと極端過ぎると思ってしまう。ただ、パウロがそう書かないといけないほどの深刻な問題になっていたとも読み取れます。

10節の「偶像の神殿で食事の席についているのを．．．」の部分は多くの宗教が混在しているコリントの町ならではの光景であったと思われます。現代の日本でいうと家族や親せき、知人の信仰している他宗教の冠婚葬祭等に行き、式に出て食事につく状況に近いでしょうか。

パウロがコリントの信徒たちに伝えたかったことは、11節の「その（弱い人である）兄弟のためにもキリストは死んで下さった」ということ。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。（ヨハネ15:12）」というイエスさまの言葉をパウロ自身は直接には聞いていませんが、しっかりとイエスさまの教えを理解しているからこそその言葉ですね。

～分かち合い～

- 他宗教の行事に参加した時にどういう気持ちになったかを分かち合ってみましょう。
- 教会に集められた一人ひとりに様々な信仰があり、それぞれが愛されているんだなと感じたことはありますか。

今週の聖書日課

4月22日（月）マルコによる福音書 10章17-22節

17イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」18イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。19『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」20すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。21イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」22その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

「殺すな、姦淫するな、盗むな、・・・隣人を自分のように愛しなさい。」という掟を皆子供の頃から守ってきたと、即答できるだけでも凄い！と思うこの人でさえ持ち物を売り払い、貧しい人々に施すことはできず悲しみを覚えて立ち去ります。

弱い私たちですが立ち去るのでは無く、万能の主に、掟遵守のお力を願い、捧げ物も逐次ご相談をして参りたいと願います。

4月23日（火）ルカによる福音書 15章25-32節

25ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。26そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27僕は言った。「弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。」28兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29しかし、兄は父親に言った。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。」31すると、父親は言った。「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。32だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

先に救われた私たちが「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。・・・。」いつもあなたはわたし(神さま)の愛の配慮の中にいるのだよ、と言う神さまの言葉を忘れてしまうと、皆さまをお迎えする側のご奉仕が続く時に、ふっと自分も歓迎されたいと思ってしまうことはありませんか？神さまに出会った初めの信仰に立ち返って、お互いに感謝と喜びを込めて歓迎し合いたいですね。

4月24日（水）マタイによる福音書 5章43-48節

43「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。44しかし、わたしは言う。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。46自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。47自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。48だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」「復讐はわたし(神さま)のすること、わたしが報復する。」(ローマ12:19)を思い出します。私はその人のために初めは祈りますが、自分が傷つかない為でしょうか？次第に無関心になって忘れてしまいます。でも主が仰るのですから、全てを益としてくださる主に信頼して、お答えが出るまで祈り続ける者になれば幸いです。

4月25日(木) ヘブライ人への手紙 10章32-39節

32あなたがたは、光に照らされた後、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してください。33あざけられ、苦しめられて、見せ物にされたこともあり、このような目に遭った人たちの仲間となったこともありました。34実際、捕らえられた人たちと苦しみを共にしたし、また、自分ももっとすばらしい、いつまでも残るものを持っていると知っているのに、財産を奪われても、喜んで耐え忍んだのです。35だから、自分の確信を捨ててはいけません。この確信には大きな報いがあります。36神の御心を行って約束されたものを受け取るためには、忍耐が必要なのです。

37「もう少しすると、来るべき方がおいでになる。

遅れられることはない。

38わたしの正しい者は信仰によって生きる。

もしひるむようなことがあれば、

その者はわたしの心に適わない。」

39しかし、わたしたちは、ひるんで滅びる者ではなく、信仰によって命を確保する者です。

信仰をいただいて歩む中で、苦しいこと嬉しいこと、胸震える悲しみも喜びも沢山あり、嘲りも経験いたしました。思い返せばいつも主が共にいてくださり信仰の友と共に、慰め励まし、共に喜んでくださいましたので、感謝を持って歩み続けることができました。どうぞ私たちにひるんで滅びる者ではなく、信仰によって命を確保する者にならせてください。

4月26日(金) ローマの信徒への手紙 8章12-16節

12それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉に従って生きなければならぬという、肉に対する義務ではありません。13肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。14神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。15あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。16この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださいます。

「御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。」(8:3) 私たちは罪から解放されたのに関わらず、時に周りの人はどう思っているかや、視線を気にしてしまうことは無いでしょうか？ 一人一人が神さまの霊に導かれて、喜んで主の命と平和の中を歩むことができますようにお導きください。

4月27日(土) フィリピの信徒への手紙 2章12-18節

12だから、わたしの愛する人たち、いつも従順であったように、わたしが共にいるときだけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。13あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。14何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。15そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、16命の言葉をしっかりと保つでしょう。こうしてわたしは、自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。17更に、信仰に基づいてあなたがたがいけにえを献げ、礼拝を行う際に、たとえわたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。18同様に、あなたがたも喜ばなさい。わたしと一緒に喜ばなさい。

時に不平が出てしまいます。ここで「御心のままに望ませ、行わせておられるのが神である。」とありますので、不平は相手方に思っているつもりでしたが、神さまに言っていることになるのですね！不平や理屈を言わないことが、清い者となる、星のように輝く、命の言葉を保つ、労苦は無駄では無い(15、16)と全て証につながることを教えていただきました。感謝いたします。

第4課 福音に共にあずかる

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 9章19－27節

主題聖句：福音のためなら、わたしはどんなことでもします。（23節）

19わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。20ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。21また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。22弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。23福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。24あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。25競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。26だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。27むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。

今週の聖書教育誌の週題は「福音に共にあずかる」です。

2022年の文化庁の報告によると、日本の各宗教団体の信者数の総数は約1億8000万人であり、神道が48.5%、仏教が46.3%、キリスト教が1%、イスラム教などのその他の宗教が4%となっています。2022年の日本の人口は約1億2945万ですから信者総数とは大きく乖離しています。このことは日本人の多くが複数の宗教を信仰、または宗教行事に参加していることが反映されたものと分析されています。

文化庁のキリスト教1%(約190万人)は総人口比で言うと、なんと1.47%となります。県別では長崎県が県人口比5%で最も多く、信徒数では東京(約85万人)がいちばん多く、次に神奈川(約30万人)と報告されています。あるキリスト教系の調査では日本全体の人口比で約6%(770万人)の人が他宗教に比べキリスト教に好意があると報告しています。つまり、約6%の方々は今でも求めておられるのです。ちなみにこの数字はカトリックとプロテスタントを合わせたものです。これらの報告を知ったうえでコリント信徒への手紙を学ぶ機会が与えられ現代の東京はコリントの町にとっても似ていると思いました。

アテネでの宣教で意気消沈したパウロにコリントでの伝道活動を恐れず語るようにと主からの励ましのみ言葉が告げられました。

使徒言行録18:9～11

ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。

この町には「わたしの民が大勢いるからだ。」と言われ、パウロはそれに応えて働きました。多くのユダヤ人が住んでいました。ギリシア人も奴隷も多く住んでいました。現代の東京のように多種多様な人々がそこに住んでおり、同じような方法での伝道は限界があったのだと想像できます。だからパウロは「ユダヤ人のように」「律法を持たない人には」「弱い人には」と、それぞれ環境の異なる人たちに一方的に同じように伝えるのではなく、彼らが理解できるようにみ言葉を紡いだのです。それにはハッキリとした目的がありました。

「9:19 できるだけ多くの人を得るためです。」そのためにはパウロは「すべての人の奴隷になりました。」と告白しています。ここでの「奴隷」という意味は、己を低くして徹底して仕えるということです。パウロは「9:23 福音のためなら、わたしはどんなことでもします。」これは「9:22何とかして何人かでも救うためです。」という目的が実現するように行動したということです。

また、パウロは福音を告げ知らせる者は、相手に対して上からとか外側からではなく、相手と同じ立場に身を置いて「福音に共にあずかる」ように勧めています。真の愛を受けた者はこれを行うことが出来ると励ましています。そして、福音を知らせた者は、救いを受けた者と共に信仰の完成を目指して走り続けようとパウロは説いたのです。

パウロはコリントに一年六カ月とどまって福音を語り教えて多くのキリスト者が与えられてコリント教会が建て上げられました。私たちの常盤台バプテスト教会は東京・板橋の地に73年立ち続けています。私たちもパウロに示されたようにすべての人の救いのためには、教会の外に出て行き、多様な環境の人たちに私たちの方から歩み寄り、福音を伝える働きが主から託されています。

コロサイの信徒への手紙1:6

あなたがたにまで伝えられたこの福音は、世界中至るところでそうであるように、あなたがたのところでも、神の恵みを聞いて真に悟った日から、実を結んで成長しています。

多くの先達者の働きにより世界中に福音が宣べ伝えられてキリスト者が世界の各地におられることを私たちは知っています。私たちが思う以上に、実は結んで成長しているのです。現代の日本の伝道はとても困難だと言われて久しいのですが、このみ言葉に励まされます。私たちの日本でも教会の外には少なくとも6%(770万人)のイエス・キリストとの出会いを求める方々が現におられるのは私たちの希望であり励ましです。

「わたしの民が大勢いるからだ」このみ言葉に応えて福音を伝える恵みの働きを互いに祈り、励まし合いながら共に担ってまいりましょう。

～分かち合い～

- どのように福音を伝えればよいか、互いの体験を分かちあってみましょう。

4月29日（月）ガラテヤの信徒への手紙 4章4－7節

4しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。5それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。6あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。7ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。

「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」なんとすばらしい言葉でしょう。私もあなたも、この果てしない大宇宙を造られ、動かされている、天地創造の神さまの子なのです。美しい地球を造り、わたしたちが生きるのに必要な、お日さまの光、空気、水を与えてくださいました。イエスさまと結ばれている信仰により、わたしたちは天の父なる神さまの大きな愛に包まれて、生かされている事に気づかされます。感謝致します。

4月30日（火）使徒言行録 26章12－18節

12「こうして、私は祭司長たちから権限を委任されて、ダマスコへ向かったのですが、13その途中、真昼のことです。王よ、私は天からの光を見たのです。それは太陽より明るく輝いて、私とまた同行していた者との周りを照らしました。14私たちが皆地に倒れたとき、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う』と、私にヘブライ語で語りかける声を聞きました。15私が、『主よ、あなたはどなたですか』と申しますと、主は言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。16起き上がれ。自分の足で立て。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そして、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。17わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。18それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンへの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。』」

私個人の意見です。天国にいるイエスさまは聖書にある4つの福音書だけではもの足りなさを感じました。もう少しインパクトが欲しい。そこでイエスさまは、パウロ(パウロ)をお選びになりました。パウロは伝道の旅へ出て、さらに各教会へ多くの手紙を書きました。そこにはイエスさまへの賛美とたくさんのみ言葉がちりばめられていました。皆が幸せになって欲しい。イエスさまの願いにより、この聖書はまわりの人々へ、後世の私たちへ、さらに未来の人々へと読み継がれていきます。イエスさま、パウロ、ありがとうございます。

5月1日（水）ヘブライ人への手紙 12章1－3節

1こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、2信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないう十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。3あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。

「自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。イエスさまを見つめながら」まさにその通りですね。イエスさまは私と共にいてくださり、私を導いてくださいます。イエスさま、いつもありがとうございます。

5月2日（木）マタイによる福音書 13章45－46節

45また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。46高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。遅れられることはない。

よい真珠とは、イエスさまです。心の雑念をすっかり払い落とし、無の気持ちになってイエスさまに従う。天の国とは、イエスさまを信じ、イエスさまと共にいる今この時ではないかと思えます。

5月3日（金）エレミヤ書 29章4－7節

4「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、エルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に告げる。5家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。6妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口を増やし、減らしてはならない。7わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。

わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求めなさい。その町のために主に祈りなさい。シスター渡辺和子さんの有名なお言葉があります。「置かれた場所で咲きなさい」ありがとうございます。

5月4日（土）ルカによる福音書 12章16－21節

16それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、18やがて言った。『どうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、19こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』20しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。21自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

わたしは幸せになりたい。それは小さい幸せです。イエスさまは言われます。「たがいに愛し合いなさい」ありがとうございます。思い合い、助け合い、みんなが幸せになりましょう。





2024.4 成人科